

特集 和泉キャンパス新図書館

ベンチマークと呼ばれた図書館

—明治大学和泉キャンパス新図書館 Izumi Model の挑戦—

坂口 雅樹*

はじめに

2012年12月24日（月）、1通のメールが明治大学図書館に届いた。杉並区民からである。そこには図書館改革なしには大学は少子化時代を生き残れない旨の言葉があった。思いがけないフレーズである。国立大学図書館には附属が〈附〉く。図書館はたかがアタッチメントである。だが区民はそうは思わない。図書館が大学の中心であると思っている。大学新時代の到来を告げるものが多機能型図書館であるとまで述べている。本当にそうなのか。和泉新図書館を見学に訪れた大学関係者の言葉に思いを巡らすと、彼らの評価は区民のフレーズを裏付けている。「和泉図書館は図書館のベンチマークである」。これが見学者の評価である。なお本稿は2012年度日本図書館協会「建築研修会」テキストに加筆したものである。

*さかぐち・まさき／明治大学 学術・社会連携部 和泉図書館事務長

1 入ってみたくなる図書館

1960年竣工の旧図書館は、1987年の増築部分を含めても狭隘化が喫緊の課題であった。総延床面積4,461㎡に対してサービス対象学生数約11,700人、総閲覧座席数1,050席がそのことを示している。そのうえ空調設備の老朽化で館内の温度差が激しく、学習環境を快適に維持することも困難であった。また、グループ閲覧室（学習室）および情報リテラシー室も学習・教育支援の環境としてはまさに最低水準と言わざるをえない状況にあった。このことを端的に示すのが学生の投書であり、とくに多いのは、音と室温に関する要望であった。今般新図書館建設にあたり、音と室温を管理して快適な環境をつくり、ここが自分たちの「居場所」であると意識できるような施設、そして人的サービスの創出を最優先課題とした。新図書館では総延床面積8,856.92㎡、総閲覧座席数1,227席（ベンチタイプを含む総座席数1,259席）となり、施設狭隘化の改善に繋がった。また学生・教職員と共に図書館が活気あふれる図書館活動を展開できることになり、図書館の中に大学があると言わしめるようなコンセプトをあらたに生み出した。本の形にデフォルメされた菱型図書館は、まさに「入ってみたくなる図書館」となった。

新図書館ができれば入館者数が増えるのは自明の理である。それよりも注目すべきは（図表1）で示すとおり、和泉図書館と中央図書館の入館者数の比較である。サービス対象学生数で和泉図書館の方が中央図書館よりも少ないにもかかわらず、和泉図書館の入館者数の方が多い。ちなみに中央図書館の総延床面積12,485㎡、総閲覧座席数は1,278席である。

昔流に言えば、〈和泉〉分館が〈駿河台〉本館を上回ったことになる。ただし新館効果という点もあり3か月間だけの比較ではまだ結論は出ないが、それでも驚異的な数字である。たとえば7月前期試験期間中は、和泉図書館は15万人に達する勢いである。このことをどう評価するか？

入館者数が増えるのは大変良いことである。では良い図書館とは何か？新図書館には12月末までに7か月間で60件余りの投書が届いている。旧図書館のような音や空調設備に関する投書は減少した。これは新図書館の目標の一つがクリアされたと評価してよい。では60件余りの投書の意味

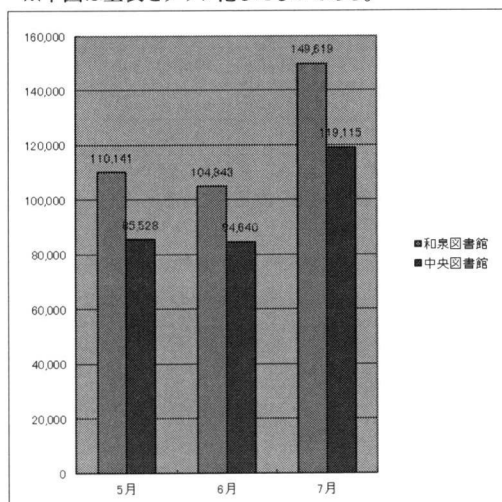
とは？それは新図書館が多機能になったことで、図書館へのニーズが次の段階に入ったことを示唆している。投書とは建設的意見である。また日本語には「もてなし」という言葉もある。サービスの本来の意味はおそらくこれではなかろうか。そういう思いで投書に向き合っている。

図表 1 和泉図書館 / 中央図書館入館者統計 (2012 年 5 月 -7 月)

	5月	6月	7月	
和泉図書館	110,141	104,843	149,619	(単位:人)
中央図書館	85,528	84,640	119,115	

※2012年度利用対象学生数:和泉図書館約11,700人
中央図書館約13,200人

※下図は上表をグラフ化したものである。



次に (図表 2) から何が見えるか？ 2012 年の入館者数の急増は当たり前である。しかし前年の 2011 年は仮設の図書館時代である。座席数はプレハブ図書館で 300 席、隣接する第四校舎では 513 席。けっして快適とはいえない環境でもこれだけの入館者数を記録した。「これだけの記録」というのは、実を言うと入館ゲートはプレハブ図書館に設置しているが、第四校舎にはないのである。つまり第四校舎の入館者数はこれには含まれていない。

座席数が300席と極端に少ない中で、これだけの入館者数を記録した理由はのちに述べる貸出冊数で明らかになる。

「入ってみたいくなる図書館」に引き寄せられた見学について述べる。開館以来、見学を申し込んだ団体は、2012年12月現在で案内を行っただけで80団体、自由見学を入れると100団体をはるかに超える。どの見学者も図書館の多機能性に賛意を示し、図書館員の活発な活動に敬意を表していた。なかでも、「この図書館で働きたくなった」という他大学の図書館員の言葉が象徴的であった。図書館員が満足する図書館こそが利用者が満足する図書館であると言える。

図表2 和泉図書館過去5年間（2008年—2012年）5月—7月入館者統計

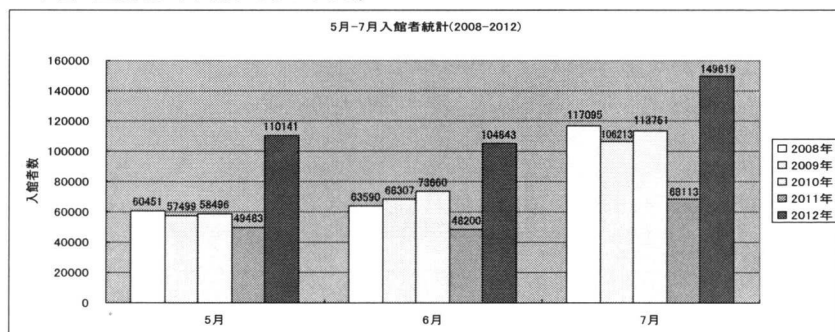
	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
5月	60,451	57,499 (326)	58,496 (406)	49,483 (146)	110,141 (964)
6月	63,590	68,307 (251)	73,660 (453)	48,200 (175)	104,843 (1,106)
7月	117,095	106,213	113,751	68,113	149,619

(単位:人)

※()内数は杉並区民の入館者数である。各月とも全入館者数の1%未満である。

※7月は試験期間中のため杉並区民の利用を停止している。

※下図は上表をグラフ化したものである。



2 Active (動) から Silent (静) へ

居場所造りのキーワードは「楽しむ・刺激する・選べる」である。空間的要素としては入口から奥へ、下層階から上層階へ、動から静へとそれぞれ

れが独特の表情をもって学生・教職員を迎え入れる。これを実現したのが音のゾーニングと光のグラデーションであるが、そればかりではなく貸出カウンターをハイカウンターとして利用者目線に変えたことが、利用者を迎え入れる準備を整えたと言える。また卒業生や杉並区民などの多様な人々を受け入れる重要な要素としても動から静への空間移行が居心地の良さとして機能している。

Active の真の意味は、図書館機能が多様化して利用が活発になることである。その活動主体は学生である。開館後、杉並区民の大幅利用増を予想してはいたが、入館者統計でみると全体の1%を超えてはいない。つまり入館者数の激増は、(図表3)にみる貸出冊数の増加と合わせても主に学生の利用増を表していることになる。図書館1階、2階は動的空間である。これを物的に支えているのが防音ガラス、フローリング、タイルカーペットの色、そして家具のカラーリングである。学生はこれをよく理解している。動的なフロアとした1階、2階でも奥に向かって Silent になる。静的な佇まいを求める学生は個と向き合う姿勢で学習している。

貸出・更新統計はもう一つの図書館の変化を表している。新図書館ができる以前から貸出・更新冊数は右肩上がりである。貸出冊数が伸びることは図書館が Active に変化する表れである。学生が図書を借りたくなる仕掛けを作ること。旧図書館における「実務・軽読書コーナー」、新図書館の「特設コーナー」の新設が、読書欲を駆り立てたことになる。

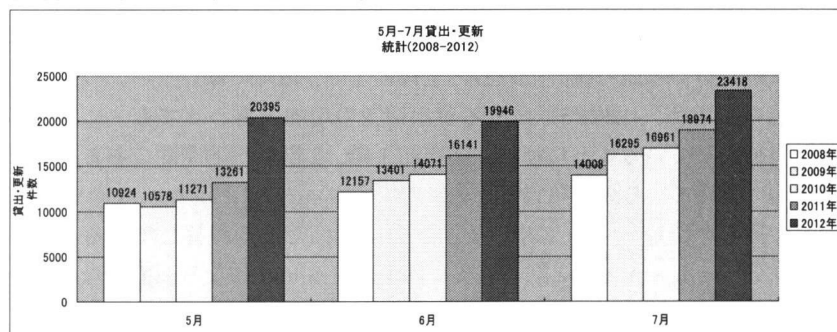
図表3 和泉図書館過去5年間（2008年—2012年）

5月—7月貸出・更新統計

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
5月	10,924	10,578	11,271	13,261	20,395
6月	12,157	13,401	14,071	16,141	19,946
7月	14,008	16,295	16,961	18,974	23,418

（単位：冊）

※下図は上表をグラフ化したものである。



3 楽しむ

空間を楽しむゆとりを提供することが、利用者への最高のもてなしである。館内では樹木、紙そして書物を目で見、肌で感じる空間がゆとりを感じる要素となっている。ホワイトコンクリートの壁・柱に樹木のぬくもりを求め、サインは紙型を採用。新聞を読むだけの空間ではなく、そこが樹木（擬木）の真下であることも癒しの条件である。テラス、デッキには植栽がある一方、自然だけに癒しの空間を求めるのではなく、机・椅子の一つをとっていても楽しさがある。そこにリラックスできる席があるから楽しめるというのではない。集中して学習できる多種多様な席を設けているから楽しめるのである。富士山を遠望できる席がお気に入りの教員もいる。また特設コーナーでは図書館員と学生が書物による知識の交流を目指して推薦図書を展示している。さらに電動集密書庫（ブックタワー）では多利用の証として、写真展が開催できるギャラリーとしての運用が可能である。

楽しみは他にもある。建物が斜め構造であることを生かした「書架の散歩道」、掲示板に代わる「デジタル・サイネージ」などの採用が、楽しめる図書館を演出している。

図書館員は仕事を楽しんでいる。開館以来8か月間、我々はどのようにして活動を楽しんできたのかを次に列挙する。

その1) ホール：弁論大会、映画上映会、プレゼン大会、ビブリオバトル等、そして極めつけは「司書の日常」の話

その2) ギャラリー：日本近代文学文庫展、和泉図書館建設の舞台裏等

その3) グループ閲覧室：ブック・シェア・トーキング（伝えたい本を持ち寄る「読活」）

その4) 特設コーナー：図書館員のおすすめ本

その5) 書架：ことわざ、おもしろ・サイン（書架側板と置き型ボードサイン）

さて、休日の話をしよう。（図表4）は休日の各キャンパス図書館利用者数である。休日でも「家を出て図書館に行こう！」である。休日の開館時間は10時から17時と短い、それでもこれだけの入館者数がある。なお和泉図書館は、旧図書館においては休日開館は前期・後期の試験期間であったが、新図書館開館を契機に休日開館日を拡大した。

図表 4 明治大学各図書館の休日開館 1 日平均入館者統計
2012 年 5 月—10 月 休日開館 1 日平均入館者数

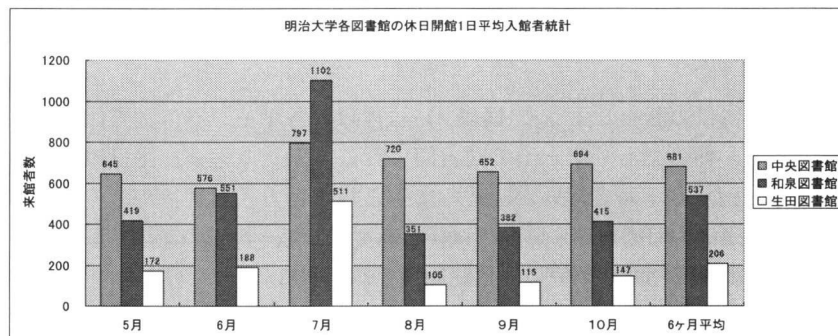
	中央図書館	和泉図書館	生田図書館
5月	645	419	172
6月	576	551	188
7月	797	1102	511
8月	720	351	105
9月	652	382	115
10月	694	415	147
6か月平均	681	537	206

(単位:人)

※機械統計による数値から算出したものである。(小数点以下の数値は四捨五入)

※7月は試験期間中のため地域開放を停止している。

※下図は上表をグラフ化したものである。



4 刺激する

刺激は「見える化」によってもたらされる。「見える化」はガラス面によって可能になる。ガラス化されたホール、サロン、情報リテラシー室は1階に集中し、2階には学生が交流・学習するコミュニケーション・ラウンジがある。ホールでは講演会・講座や授業の一部を行い、サロンはカフェ営業終了後に図書館閲覧席となり、コミュニケーション・ラウンジ（グループ・共同閲覧室、留学生書架）ではグループ学習のほか、イベントも行っている。これらの賑わいは外部からでも容易に望める。そこには知的好奇心がある。

書物だけが好奇心を誘うのではなく、他者の活動を目にすることも重要な要素である。それはまさに学習者が刺激し合うことに繋がっている。

(図5)は情報リテラシー室の利用状況である。この部屋は図書館リテラシー教育の中心的役割を担っている。2012年度は前・後期合わせて4か月間、図書館員が211回の授業を行った。専任職員6名に業務受託スタッフ15名が支援する形で行った。

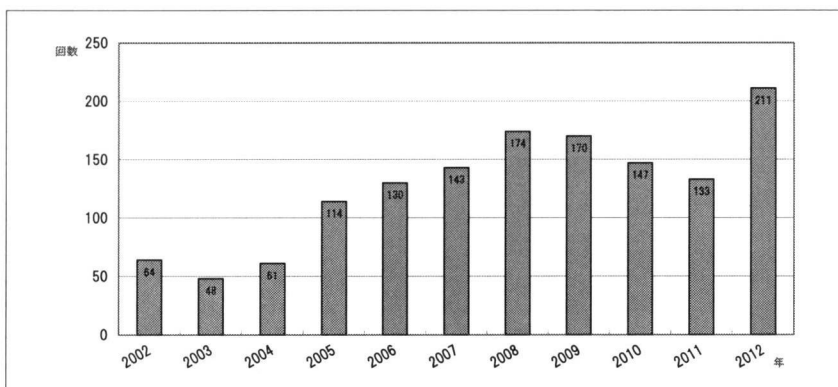


図5 ゼミガイダンスまたは学部基礎科目における図書館利用教育実施統計

図書館リテラシー教育活動の牽引的役割を担っているのは、学部間共通総合講座「図書館活用法」(半期2単位)とゼミ・基礎科目の図書館ガイダンスである。この活動は教務部門の協力なしにはなし遂げられない事業である。とりわけ和泉図書館は次の項目で述べるのと同様に、和泉教務課・学習支援室の強力な支援を得て遂行している。

5 選べる

図書館活動を支えるのは図書館外の部署との連携である。大学院生(TA)の派遣、留学生イベントおよび就職関連の講演会などは他部署との連携によって生まれる。一方図書館員も研修会に積極的に参加してモチベーションを高め、学習支援に直接貢献している。例えばレポートの書き方支援に

については2階に設けたサブカウンターでは大学院生が対応しているが、1階サーチ・アシストでは図書館員が学生を指導している。学生がどちらを選ぶかは自由である。また選べるのはこれだけではない。活動場所、授業・学習場所さらには図書館さえ学生は選ぶ。山手線沿線私立大学図書館コンソーシアムで学生に選ばれた大学はどこか？それこそが究極の「選べる」である。

冒頭で述べた杉並区民は和泉図書館員についてこうも述べている。「司書の方々のレベルも高く、この図書館がもたらす効果は今後計り知れない気がします」。図書館を選ぶこととは、図書館施設だけではなくこれを生かすことのできる図書館員を選ぶということなのである。

6 おわりに

「入ってみたいくなる図書館」とは、すなわち「入ってみて良かった図書館」である。だが建物の外観や内観に魅了されるだけでは良かった図書館とは言えない。区民のいう「司書のレベル」である。レベルとはスキルの高さと接客態度の両方を指す。図書館員は箱モノを造れないが、学生が楽しみ、刺激し合い、そして選べる図書館を創り続けることはできる。それには学生を支える人「図書館員」の中に匠を生み出さなければならない。一言でいえば、「価値」を生む人を創ること。そのためには、図書館員は図書館を自己の内側に置かなければならない。